

# ましろのごとく

吉岡 洋 (京都芸術大学文明哲学研究所)

住宅地にサルが現れるとニュースになる。そうした映像を観ていると、人間たちは大騒ぎして追いかけて回しているのに対し、サルはといえど刺激されない限りしごく冷静で、むしろ淡々と行動しているように見える。まるで、サルの方が人間らしい。人間の演じるサルの真似は実はサルにはちっとも似ておらず、むしろ人間自身を戯画化しているがゆえに苦笑を誘うのかも知れない。

一度だけ、野生のサルと思いがけず対面したことがある。もう何年も前のある初冬の夕暮れ、琵琶湖疏水に沿った道を山科から四宮に向かって歩いていた時、対岸の山裾の木の枝に一頭だけ、ポツンと佇んでじっとこちらを眺めていた。あまり目を合わせないように通り過ぎたが、孤猿はととも落ち着いた様子で、まるで小原古邨の絵のようだと思った。

子供の頃住んでいた伏見区深草の下町で、駄菓子屋の店番をしているお婆ちゃんがよく独り言のように愚痴を呟いていた。売り物の菓子をくすねて逃げて行くけしからん坊主がいたと言う時「ましろのごとく」という言葉を使った。「ましろ」とはサルの古名である。「ましろのごとく」「ましろのように」は、逃げたり木登りをする動作の素早さを形容する定型句で、ある時期までは小説などでよく使われていた表現である。その頃は本当にサルのようにすばしこく盗み食いをするような悪ガキも実際にいた。今の子供はみんなお行儀よくなり、生きるための動物的な巧みさを奪われたので、ましろのような子はほとんど見かけない。

山に入って生活するのでないかぎり、昔の人たちだって野生動物としてのサルとの交流がそれほど頻繁であったとは思えない。しかし文化的なシンボルとしてのサルは、生活の中に深く

根差した存在であった。なにしろ干支の一つなのだから、時刻から方位から生まれ年から、いってみれば世界の 12 分の 1 はかつてサルで出来ていたのである。そういう私自身も申年生まれだ。

伝統芸能もサルとは縁が深い。猿舞しは千年以上もの歴史を持つと言われるし、能や浄瑠璃にもサルは時々登場する。そうした芸能の源のひとつが「猿楽」と呼ばれていた時代すらある。狂言の「鞆猿」は、大名が猿引つまり猿舞しの芸人に、自分の矢筒に毛皮を張りたいたいからそのサルをよこせと無理を言う話だ。サルの毛皮なんて大名が欲しがったのだろうかと思うが、同じ疑問を持った柳田國男による「猿の皮」(『孤猿隨筆』)を読むと、猿皮も物によっては珍重されていたらしい。

40 歳前後の約 10 年間に湖西の和邇という所で過ごしたので、比叡山の東麓にある日吉大社にはよく遊びに行った。日吉は日枝とも呼ばれ、これが比叡山の名の元である。山王権現という通称もあるが、山王とはサルのことだ。稲荷神社の神の使いがキツネであるように日吉神社の使いはサルなのである。神猿と呼ばれて本当に境内の檻の中に飼われている。

さらに思いつくままに文化の中にサルを探してみると、今でもときおり見かけることのある「庚申塚」という石碑がある。これは道教に由来する古い信仰で、それが江戸時代には民間にも広がった名残りである。人の身体に住んでいる三尸という虫が、五千十二支の 57 番目に当たる「庚申」の日になると、眠っている間に身体を抜け出してその人の悪事を天帝に告げると考えられていた。悪事を密告されては大変だから、この日の夜はみんな寄り合って飲食し徹夜をする。60 日に一回そういう日が巡ってくるので、





①市中に現れたニホンザル (*Macaca fuscata*)。(撮影:赤見理恵) ②1頭だけポツンとたたずむ若いオスのニホンザル。(撮影:赤見理恵、青森県下北半島) ③歌川国芳「猿廻し図」。④面「小猿」。⑤日吉大社の神猿像と絵馬。⑥伏見土人形の三猿。⑦青面金剛図。(③~⑦はいずれも日本モンキーセンター所蔵資料。撮影:新宅勇太)

こうしんこう  
「庚申講」として共同体の互助機能を果たすという面も生まれた。

この庚申信仰のご本尊は青面金剛という不思議な神様なのだが、それを描いた掛け軸や石碑には、サルがよく登場する。「庚申」という言葉にサルが入っていることからの連想にもよるのだろう。青面金剛の両脇を護っていたり、いわゆる「見ざる聞かざる言わざる」の三猿が描かれていたりする。三猿というのはエジプトからユーラシア大陸に分布する図像であるが、日本ではそれが庚申信仰に結びついて広く普及した。うまいことに日本語の「……ざる」という音がサルに通じる。すばしっこさにかけては人間な

ど敵ではない猿たちが、人の悪事にあえて目と耳と口を塞いでいてくれるとは、まことにありがたいかぎりである。

著者

吉岡 洋 よしおか ひろし



京都芸術大学 文明哲学研究所・教授。哲学的美学や芸術学に関わる論文、著書、翻訳などをおこなうと共に、美術展やメディアアート展の企画、批評誌などの編集、メディア芸術の振興、映像インスタレーションの制作などをおこなってきた。